

県内河川で放流される主なアユ種苗の冷水病耐性

水産試験場

[研究のねらい]

近年、アユ種苗は系統により冷水病耐性に差があることが報告されており、本県でも平成20年より耐病性種苗が県外より導入・放流されています。しかし、この耐性種苗と他の県内放流種苗の具体的な違いは明確でないため、感染実験を行い、その死亡率から冷水病耐性比較しました。

[研究の成果]

- ①A: 他県耐病性人工、B: 本県海産、C: 本県海産由来人工、D: 他県ダム湖産由来人工の4系統の種苗を用い、各系統を30尾ずつ別のFRP水槽(130L容)に収容する分離飼育と同一のFRP水槽(400L容)に15尾ずつ収容する混合飼育による感染試験を行いました。
- ②分離飼育、混合飼育とも累積死亡率はD>C>A>Bの順でした(図1、2)。
- ③有意差(P<0.05)がみられたのは累積死亡率が最も低いBと最も高いD間のみで、それ以外の系統間では認められませんでした。累積死亡率の順は概ね各種苗の冷水病耐性を反映していると考えられます。
- ④ 以上より、本県海産を親魚として生産された種苗の冷水病耐性は、耐病性種苗と大差ないと考えられます。

[成果の活用面・留意点]

本県産海産を親魚として生産されたアユ種苗は十分な冷水病耐性を持ち、また地域固有の遺伝子を持つことから、冷水病被害の軽減、健全な生態系を維持するのに望ましいと考えられます。

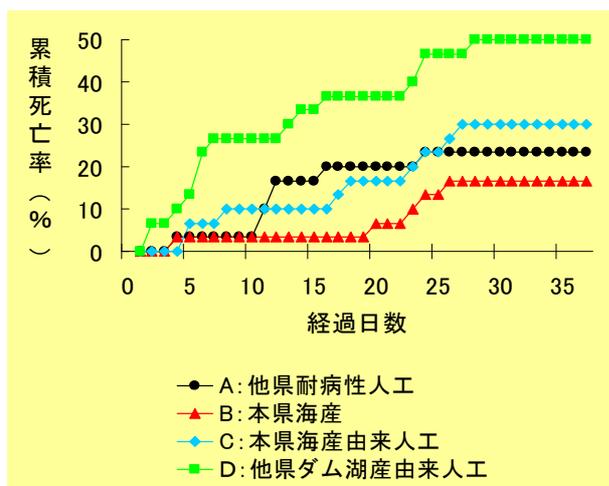


図1 分離飼育による累積死亡率の推移

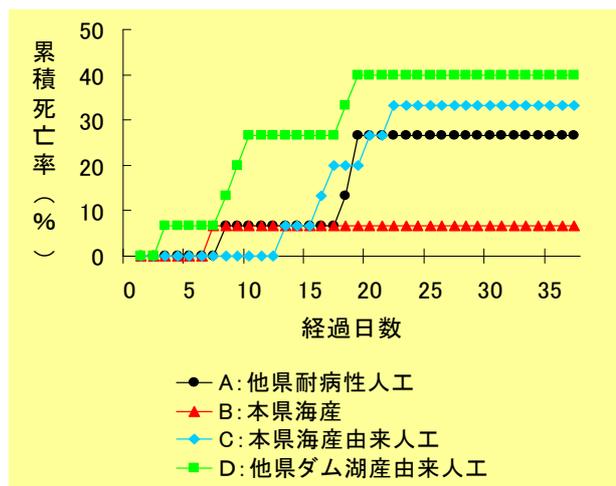


図2 混合飼育による累積死亡率の推移

(問い合わせ先 TEL:0736-66-0171)